

竹野滴「麩菓子」(「麦笛」第16号)

は、大阪で二歳六カ月の息子・純希と夫の拓史の三人で暮らしている女性を語り手にしています。実家のある金沢に帰省し、母親の入院する病院に通いながら、最期はその母親を看取ることが出来ずに病室を抜け出してしまった語り手に、自身がうつ病と診断されながらも仕事で東北の被災地へと派遣されていく拓史。周囲から孤立した親子の暮らしのなかで、「よわざ」とは何かを見つめながら、語り手が踏みとどまるように生きている姿が切実に感じられる作品でした。実家の和菓子屋を継いだ兄とのエピソードも一時的な日線ではなく、海辺の出来事についての記憶を交えながらの抑えた語りになっていて、その公平さや誠実さに、自分を責めながらも、どうすることもできない語り手の葛藤が表れているように見られます。何かを名付けず、決意もせず、曖昧なまま揺れ動く周囲との関

係や語り手自身の気持ち、ひらがなの多い印象的な比喩表現の日立つ文章で見事に紡がれていると感じました。

同じく「麦笛」から、高橋道子「ケガレ」は、原発事故直後の春に、福島第一原発から二十数キロの地点にある自宅へと帰還した女性を語り手にした作品です。無農薬で農業を営み、三万本のホダ木を育てていた生活に降り注いだ放射性物質。東電へ請求するための「捨てるための収穫」や、保管していた米に湧いた蛆虫をピンセットで摘み上げる様子など、やりきれない虚しさが滲み出ます。教訓や達成感もなく、事故の当事者ではない農家が実際に手を動かして作物を廃棄している状況。そのなかで冷静な分析と科学的根拠のある情報に頼りながら出植えを始める人間の姿に、淡々とした力強さがありました。

続いては、はのさとこ「再生する魚」(「あまのがわ二〇一六」通巻13

号)です。語り手の「私」は職場の同期である下野くんと交際していました。好きなある日、後輩の坂上さんを好きになってしまった、と彼の方から別れを切りだされます。「ちゃんこの数年間を自分で終わらせたい」と、彼と坂上さんとの間を取り持つことを下野くんに納得させた「私」は、容姿端麗でこれまで近寄り難かった坂上さんへと接近し、思いがけず親密な関係になっていきます。

下野くんを外側に置き去りにしたような奇妙な三角関係のなかで、水槽に囲まれながら床にうつ伏せで死んでいた坂上さんの元恋人という存在が通奏低音のように響いているような感覚がしました。同性愛的な雰囲気も醸すような生活のなか、「私」が坂上さんの背後にいる彼を思うことで、繰り返される水のイメージが悪しきものから無害なものへと中和されていく過程が書かれているようにも思えます。また、

登場回数は少ないですが、藤原さんもリアリティのある人物で、後半の会話の場面は特に面白かったです。

斉藤せち「マイセルフ・ウイズ・マイルーム」(「樹林」623号)は、かつて

人間だった頃に暮らしていた部屋と同居し、実体のない視点となった女性を語り手に、誰もいなくなった部屋で次々と引き起こる出来事が書かれます。「自我と部屋の境界が曖昧になり、混ざり合いつつある」というなかで、部屋を訪れて単体で動く「手」や、バルーン状の黒いワンピースを着た太った女性が登場したりと、どこか象徴的で悪夢的な光景が展開していきます。血しぶきが飛び散り、部屋自体も崩壊させるような暴力的で謎めいた場面に介入できない語り手に対して、その出来事の描写はひたすら緻密に重ねられていく印象です。定点から監視カメラのように見ているのではなく、自在に動きまわる視点からの描写に独特の浮遊感がありました。ラストシー

ンで飛び降りる直前の、静かに高揚した感じも強く伝わってきます。

続いて、清水公介「みつめて」(「空とぶ鯨」第17号)です。人並み外れて醜い容姿をもったミミヲは、ゼミの旅行で訪れた旅館の廊下で誰かの視線を感じ、桐柵に並ぶ人形のなかに女人の「おにんぎょうさん」を見つけます。頭からすっぽりと真つ黒いマントを着た「おにんぎょうさん」にミミヲは特別な思いを抱き、翌日、鞆のなかに彼女を入れたまま旅館をあとにします。

醜く崩れた富士山、罪人を吊るす刑場や、白い詰襟制服を着て刀を差した警史など、現代とは隔たったデイストピア的な世界で、人形を守るために逃げまわるミミヲの行方にもスリルを感じました。ミミヲが体液を漏らす様子や刑場の腐乱した死体など、グロテスクな描写がどうしても目立ちますが、流れるようにストーリーを読ませる文章にも巧みなものがあると思います。ラストの「おにんぎょうさん」のセリフ

は、中盤に登場したミミヲを捨てた母の言葉に繋がりますが、飛蝗のお面を一度も取ることもなかったという母の存在が、そのセリフとどのように関わっているのか気になります。

堀井清「無名の人」(「文芸中部」104号)は、八十五歳の父親とふたりきりで暮らす造園会社の従業員を語り手に、職場の同僚や同世代の男女が抱える家族の問題が、語り手自身の心境の変化と共に書かれます。嫁姑問題で家を出た嫁が、姑が亡くなると義父を連れて戻ってくるなど、家族に振り回される同僚の話や聞くことで、家族や人間関係とは何かについて考え込んでしまふ五十歳独身の語り手の素直さや素朴さがよかったです。ラストシーンで父親と交わす会話の言葉にならない感じは、どこか滑稽でありつつも切なさが残りました。

その他にも、早高叶「赤い花咲く水の中」(「カム」14号)が印象に残る作品でした。